

## 『留学』について

——南仏・エクスとスイス・ジュネーヴへの留学から——

小室 廉太

### はじめに

あらためて考えてみると「留学」という表現は奇妙なものである。漢字による構成からみると、一般的に考えられている「留まり学ぶ」という意味と、「留まる事を学ぶ」という意味という二つの解釈が成り立つのではないだろうか(ちなみに中国語でも日本語同様の意味しかない)。本文はこれからフランス語圏へ「留まり学」ぼうという方々にとってのより良い「留まり方」の一助となる事を望んで記したものである。無論、後述する私の「留まる」為の努力が全く無駄とは思わない。だが、道草の是非にかかわらず少しでも近道は知っていた方が良いとは思うのである。

### 「留学」——何を学ぶか

もし初めて留学をしようという方々には短期の語学留学をお勧めしたい。「何を」学ぶにせよ、我々外国人にとって言葉が最大の問題であるのは言うまでもないからだ。フランス語を既に理解できる方には大学付属の語学コースが良いと思う。コースとしては通年(前期、後期)、1ヶ月あるいは週単位の講習があり、前期或いは後期のみの受講も可能である。外国人に対するこの語学コースは専門の講師があたり、授業の質、量とももしっかりしている。また、ヴァカンスを兼ねての留学なら私立の語学学校も良いかと思う。なお、大学や学校によって授業時間数や受講料の違いがあるので、比較検討していただきたい。

大学の学部、大学院への留学で問題となるのが、具体的に「何を学ぶか」ということである。自分の専門がはっきりと決まってい、しかもその研究が良く知られた作家、ジャンルについてならば、比較的容易に学べべき「場所」が見えてくる。その分野のフランス語の文献を探し、著者が大学教授なら勤務先

の大学に手紙を出し指導依頼するのである。ただ、著名すぎる教授だとあまり指導をしていただけない場合があるので避けたほうが賢明かもしれない。問題となるのは対象となる作家についての研究がなかったり、研究対象が分野として確立していない場合であるが（私見ではこうした全く新しい研究の方が興味を示してくれる先生が多いようである）、その場合は世紀を当てはめてみたり、キーワードをインターネットの検索エンジンで調べ、自分の研究対象に興味を示してくれそうな教授を探し出すことである。

## フランス留学について

ここに具体例として私のフランス留学の経験を記そうと思う。私は学部時代にある先生の影響を受け、大学3年の時に短期留学をし、大学院を受験する頃には長期留学を決めていた。大学、大学院ともにG・パタイユの研究をしていたが、留学となると自分の指導を引き受けてくれる先生を探すのが大変なことに気づいた。私の日本での指導教授は「留学するなら自分で指導教授を探してくる位の気が無ければ駄目だ」という考えの先生だったので相談には乗ってもらえなかったし、また、パタイユの研究書は沢山あるが、当時（1996-1997年）のフランスの第三課程のある大学の教授では中々見つからないのである。たとえば感銘を受けていたD・オリエ教授はアメリカに渡っており、当時アヴィニオン大学にいた（現在はナンシー大学）G・エルンスト教授の下では博士課程がないためDEA論文は書けない。パタイユの伝記を記したM・シュリアは大学教授ではない。今ならインターネットの検索エンジンで豊富な情報を得られるのだが、当時の私が頼りにしたのは書物からの情報とフランス大使館にあった一、二年前の大学年鑑（大学の住所と学部、学科、博士課程の有無について記されたもの）だけだった。問題はそれだけではなかった。留学にあたりロータリー財団から奨学金を受けたのであるが、留学先は派遣年の2月まで明らかにされなかったのである（詳しくは『AZUR』創刊号の高瀬智子さんの「留学にいたるまで」を参照。高瀬さんの稿との併読をお願いし、加えてここに彼女に対しお礼を述べたい）。今思えば派遣される可能性のある全ての大学に連絡を出来るだけ早く取り、入学許可証をもらうべきであったが、当時の実直な私には行くか行かぬかも分からぬ大学の教授に指導を請うのは不躰も甚だしく思えたの

である。とはいっても心の中ではパリに行くだろうと思っていた。先に述べたように自分の専門の範囲では F・マルマンド教授以外には思い当たらなかったからである。しかし、実際に派遣されたのは第二志望のプロヴァンス大学だった。意外であったが落胆はなかった。大学のあるエクス=アン=プロヴァンスへは既に一ヶ月ほど滞在したことがあり、知り合いもいて街としても気に入っていたからだった。指導教授はすぐに決めた。南仏を代表する作家であり、プロヴァンス大学の教授でもあった R・ジャン氏である。氏については映画化された『読書する女』や大学の学部時に授業で読んだ短編を通じての知識位しかなかったが、大学では現代文学を担当している事を聞いていたからだ。早速大学宛てに指導教授依頼の旨と自分の経歴および研究計画を記した手紙を出した。ところが一ヶ月経っても返事は来ない。手紙の内容に不備があったのかと思ったが文意が全く通じない訳はなかった。再度手紙を出したところ、二ヶ月半を過ぎた頃に一通の手紙が大学から届いた。小さな文字で記されたその手紙には「レイモン・ジャン氏は既に教授を退官しました。バタイユの研究でしたら私が指導しましょう。同封の入学願書を 8B 事務室（博士課程事務室）までお送りください」と読めた。署名には「ジャック・シャボ」とある。もう 5 月を過ぎていたのですぐに必要な書類を送ったが、一ヶ月経っても返事は来ない。不審に思い再度手紙を送ったが音沙汰は無かった。その間アメリカのロータリー財団からは入学許可証とヴィザのコピーを送るように催促が来た。フランス大使館の方では教授の承諾だけではヴィザは発給できない、とのことだった。それでもロータリー財団からは 9 月にトゥールでの語学研修が義務づけられていた。仕方無しにシャボ教授の手紙のコピーのみを財団に送ったところ、兎に角渡仏するよう、旅費は後日ヴィザが取れた時点で支払う、との連絡が来た。

シャボ教授から連絡が来たのは、トゥールの語学研修を受けている 9 月中旬だった。日本を発つ前に教授自宅宛てに出した手紙を読んだとのことだった。講演旅行とヴァカンスから家に戻ったところで、これからまた外国に行くという。10 月末には戻るなので、その折にお会いしましょう、とのことだった。後で知ったことだがプロヴァンス大学では DEA 以上の課程では『第三課程委員会』で協議された後に入学の許可が下りるので、教授自身の判断では入学許可を出せないし、無論夏休み中は委員会が開催される訳は無かったのである。さらに

現地で判ったことは大学の事務方と教授の連絡が密接に行われていないのである。なぜなら 2 ヶ月後に私が大学事務室で登録を行なう折には、アヴィニヨン大学で修士を終え、プロヴァンス大学の DEA に登録をしようとしていたフランス人学生が、アヴィニヨン・プロヴァンス双方の教授の了承を得ていたのにも関わらず、事務方の不手際で期限内に登録が行えず入学不可となるからだ。

9 月末に晴天に恵まれたツールでの語学研修を終え、暗澹たる思いで当時パリにいたある先生宅にお邪魔したのをよく覚えている。折しも右派政権による不法滞在移民の締め出しが行なわれており、教会に寝泊りする不法移民と彼らを排除しようとする憲兵隊の衝突がメディアを賑わせていた。こうした情勢下、自分が日本人であり、3 ヶ月間は観光客として滞在できると判ってはいても動揺は隠せなかった。同時期に来た先輩の一人は大学の入学許可証をもらった後一時帰国する予定だったし、もう一人の先輩は大学付属の語学学校の入学金を払い、語学学校の修学ヴィザを取得して渡仏していた。私も兎に角入学許可証をもらって一時帰国をしようと考えていた。

10 月 1 日にエクス=アン=プロヴァンスに着くと、地元のロータリークラブの方が駅まで迎えに来てくれた。氏は私の担当ではなかったが、大変親切にしてくださいました。入学許可証及び学生ヴィザの話をする、教授が指導を引き受けてくれたのだから入学許可は下りるだろう、ヴィザの問題は知り合いの外務省の友人に相談してくれる、とのことだった。問題は他にもあった。ヴィザが無い為奨学金は受けられないし、送金を頼む為の銀行口座も作れない、アパートを長期契約することも出来ないのである。結局 « Sans papiers, sans abri » の私は 1 ヶ月以上の間ロータリー会員宅の居候となったのである。

10 月 25 日にやっとヴァカンスから戻ったシャボ教授と面会が出来た。4 枚ほどの研究計画書をもとに面接、マルセイユ訛りが聞きづらかったが DEA での指導を快く引き受けていただけだ。翌日前もって相談していた文芸学科の主任教授に早急に第三課程委員会を開いてもらうようお願いし、書類提出期限の 10 月末にやっと入学許可が下りた。さらに大学院事務課の課長に直截お願いをし、ヴィザのコピーを後日持参するという条件で学生証の発給をしてもらった。ヴィザに関しては例外的に一番近いイタリアで交付してもらえることになり、申請と受領の為二度トリノにあるフランス領事館に赴いた。こうして私が実際にヴィ

ザを交付されたのは渡仏から3ヶ月を過ぎた11月18日、その直後に申請した滞在許可証が発行されたのは実に4月21日である。

この時間経過から判るとおり、フランス、とりわけ南仏に来て感じたのが事務手続きの緩慢さである。無論5年前と現在では状況が変わっていることを付加せねばならないだろうが(例えば政権が右派から左派に変わった事で滞在許可証の申請書類が削減された)いずれにせよ日本人のメンタリティーから考えると遅さを感じずにいられないだろう。逆にいえば手続きは早くやるのに越したことはないのである。

次に私の登録した文芸学部 *Lettres et Arts* のDEA課程の授業について述べると、授業内容が専門研究セミナー *Séminaires spécialisés* と、多岐にわたる分野、方法論についての授業 *Cours interdisciplinaires et de méthodologie* との二つに分かれており、それぞれの分野から少なくとも二つずつの授業を選択し、さらに選択した各分野それぞれ一つの授業について1行スペースで30枚程度の小論文の提出が義務づけられていた。分野毎に15以上の授業があったので選択の余地は広がった。私は指導教授の授業(異様さ・崇高さ・滑稽さの各概念をテーマにしていた)のほかに翻訳論の授業、ベンヤミンのボードレール論を扱った授業、ルネサンス絵画についての授業、それに映画論についての授業を選択した。なお授業時間は90分が2時間であった。小論文については指導教授の授業でユゴーの『リュイ・ブラス』における登場人物の精神分析を取り上げ、もう一つはボードレールにおけるダンディズムの変遷について書いた。印象に残ったことは選択の幅が広いので好きな授業に出られることと、生徒の側からの積極的な授業参加と先生方が授業の後も時間を惜しまず生徒の質問に答えてくれることだった。選択の幅が広いとは、言い換えればつまらない授業には誰も出席しなくなるので、生徒の先生に対する評価が目に見えて現れる。一回一回の授業に緊張感があり、快い疲れを感じさせてくれた。なお、生徒の登録数は全体で40人ほどで(その他に聴講生、博士課程在学者もいた)、半数が外国人であった。DEAの本論文について述べると、論文の枚数は12ポイントの活字を用い、1~2行のスペースで80枚以上が目安と指導教授にはいわれたが、論文の様式については殆ど自由で、私は130枚書いたが、内容が良ければ80枚でも充分評価してもらえるようだ。なお、DEAは1年で取得でき、もし終わらない場合は指導教授の

承諾の上、さらに1年の延長が認められる。

ここにフランス留学の為の必要書類および留意点をまとめてみようと思う。

## 1. 指導教授とのコンタクトの取り方

先に述べたように私は文献から教授の在籍大学を調べ指導依頼の手紙を書くという方法を取ったが、日本にいる先生に知り合いの先生を紹介してもらえばのならばそれが一番の方法だと思う。何か困ったことがあった場合に仲介に入っただけでいただくことも可能だからだ。

もし何の伝もない場合は現在ではまずインターネットの検索エンジンで専門分野や作家、或は学びたい大学を調べてみる事をお勧めする。教授自身が自分のホームページを持っている場合もあるし、いくつかの大学ではホームページ上に各教授の専門分野及びメールアドレスを開示している場合がある。突然メールで指導をお願いするのは不躰とも思えるが、ある教授に言わせれば手紙を書くよりも早く正確な情報を送れるから教授自身にとっても都合だということである。ただ、中には1日に30通以上のメールをもらう先生や、大学からメールアドレスをもらっても自分では使っていないという先生もいるので、返事が必ず来るかと言うと一概には言えない。教授に指導を引き受けていただけただけの場合には、出来るだけ早く入学許可証（登録許可証）取得の手続きをする。

## 2. 入学許可証取得の為の必要書類

履歴書（写真貼付）/ 研究計画書 / 戸籍抄本 / 高校卒業（成績）証明書 / 大学学部時の成績証明書（卒業証明書）/ 修士課程成績表（修士課程修了書）/ 入学申請用紙（記入式）/ 質問表（記入式）/ 証明写真一枚

履歴書と研究計画書は教授宛てに送ったものであり、その他の書類が大学への入学申請に必要となる。教授宛ての研究計画書には参照予定文献リスト Bibliographie を付けるよう面接時に指導を受けた。高校の証明書はプロヴァンス大学入学申請時には卒業証明書だけで済んだが、政府の奨学金試験を受ける際には成績証明書（バカロレアの成績とみなされるらしい）が必要な場合が

あるので、卒業を含めた内容としての成績証明書の仏訳が望ましい。同様に大学学部、修士課程の成績証明書も「成績及び卒業証明書」として仏訳をお勧めする。

私が初めて渡仏した折にはこれらの証明書は自分で仏訳し、フランス大使館あるいは領事館で証明印をもらうという方法が取れたが、現在フランス大使館のホームページによると、予め指定の翻訳会社が翻訳した書類でなければ認証を行わないとのことである。戸籍抄本についても同様である。大使館推薦の翻訳会社は10社程あるので、手数料、所要日数等を各自問い合わせて比較していただければと思う（稿末のフランス大使館のアドレスを参照）。なお翻訳を依頼する場合、翻訳証明書は活字が幾分小さくなくても出来るだけ一枚の用紙にまとめてもらうようにしたほうがよいと思う。なお大使館による認証は一枚につき1600円とのことである。ヨーロッパ諸国ではコピーが証明書として通用するので、原本（証明印のある翻訳証書）は必ず自分で保持し、たとえ手続書類にコピーの但書がなくともコピーのみを送付することを注意しなければならない。現地で正式登録の際にコピーを照合するので、原本はその折に必要となる。記入式入学申請用紙は大学から送られてきたものである。大学の申請書類要綱には『質問表』が挙げられていたのだが、実際には送られてこなかったのみでなく、本登録の際にも必要とされなかった。なお、入学許可証は学生ヴィザ取得のための書類なので、後述の本登録までの仮登録と考えてよいと思う。

### 3. 滞在許可証を申請する為の必要書類

戸籍抄本（出生証明書）/ パスポート（ヴィザ）のコピー / 銀行口座（残高）証明書 / 在学証明書（学生証のコピー）/ 白黒の証明写真

パスポートのコピーについては全ページを求められた。滞在許可書申請時に在学証明書の発給が間に合わない場合、入学許可証のコピーを提出し、後日学生証のコピーを追加書類として持参すれば済んだ。2000年度からは住居証明（電気・電話などの自分名義での支払証明）と保険加入証明書は必要なくなったようだが、エクス友人によると出来れば用意しておいたほうが良いという事である。他に初年度に健康診断を義務付けられたが、日本における健康診断書な

どの提示は求められなかった。

#### 4. 大学本登録の為の必要書類

2 で記した書類の原本 / 登録用紙 ( 記入式 ) / パスポートのコピー / 奨学金を受けている場合はその証明書のコピー / 授業料納入の為の銀行小切手あるいは郵便為替 / 証明写真一枚 ( 学生証用 ) / 自分の住所を記した封筒 ( 学生証送付用 )

#### 5. その他の必要書類、留意点

大学の登録に関してDEAのレベルでは日本の修士終了以上の学歴を求められた。なお大学の年間登録料については2001-2002年度で修士及びDEAが994FF、博士課程で1778FFである。

先に記したように滞在許可証申請の際には健康保険加入義務が無くなったようだが、もし日本で海外旅行保険などを入った場合は忘れずにフランス語の証明書を申請するべきである。ちなみに私はある海外資本の保険会社の保険に加入しているが、証明書は無料で加入翌日発行された。現地で健康保険の加入も可能で、その場合は900FF程度から加入でき、病気にかかった場合3割が自己負担である。

もし必要書類が期限内までに間に合わなそうな場合などは、諦めずに兎に角交渉をするしかない。この場合はなるべく直接その部門の責任者、例えば学科主任や事務長と連絡をとって指示を仰ぐことが肝要だと思う。学科主任の教授に会うというのは気が引けるが、私の経験からすると上の立場にいる人の方が自己裁量の範囲が広い分、親切かつ的確な判断をしてもらえる。逆にいうと下の立場の人は自分が知らないことは出来ないと判断する傾向があるようだ。

### スイス留学について

フランス留学について語った後にスイス留学を語るのは問題を見出すのが難しい。というのもスイスは行政的に非常にしっかりしており、先生方と大学の事務方の連携も密接であるからだ。

私がジュネーヴ大学における指導教授ローラン・ジェニー教授の名を見つけ



たのは、またしてもバタイユ関連の文献からだった。教授は 1997 年に『失墜の経験』という本を出版しており、この本の一章をバタイユに割いていたのである。

ジュネーヴ大学はインターネットのホームページがしっかりとしていて、文学部事務室や各専攻の主任教授のメールアドレスだけでなく、専任・非常勤も含めた先生の授業内容、連絡先メールアドレスまでも知ることが出来る。スイスの大学ではジュネーヴ大学は突出してインターネットの分野に力を注いでいるようだが、他のフランス語系大学のホームページもちゃんと機能しているようである。この点においてスイスの大学で学ぼうとするなら指導教授探しは比較的スムーズに行えるのではないかと思う。

スイスの大学制度はフランスのそれと若干異なっており、学士が最短 4 年（フランスは 3 年）、その後には修士は無く直接 DEA 課程へと進む。DEA も 1999 年までは DES (Diplôme d'études supérieures) と呼ばれており、現在フランスの大学制度との共通化が行われつつあるようである。実際にジュネーヴ大学の DEA 修了後にフランスの大学の博士課程に進学する例もあり、名称の変更は大学間の資格の互換性 Equivalence のためかと思われる。ちなみに日本の大学で学んだ日本人が DEA の入学許可を受けるのにはフランス同様に修士号か同等の資格が必要であるとのことである。私の在籍している文学、文化専攻の場合、申請書類としては志望理由を書いた手紙、履歴書、大学、大学院の成績証明書及び卒業証、研究計画書および希望専門（後述する 4 専門の一つ）を明記した書類を留学希望年の 6 月 1 日までに事務室に送ることになっており、私の場合は申請から一ヶ月経たない位で入学許可証が送られてきた。大学登録に関しては、学生課に赴き申請用紙に記入し、入学許可証、パスポートのコピー、それに先を送付した証明書の原本の提示を求められた。学生証はその場で発行されるが、その後に学費納入用の用紙を渡され、郵便局で支払を済ませ、学生証に支払証明を貼って初めて登録完了となる。

私は現在スイス政府の奨学生としてジュネーヴ大学に在学しており、滞在許可証の申請にはジュネーヴ州の移民局にて窓口にある申請用紙に記入し、政府奨学生である事を証明する手紙、パスポートのコピー、大学の学費支払証明証のコピーを提出し、三週間後には郵送で学生用滞在許可証 Permis B が送られて

きた。一般の学生でも保険加入証明を提示しなければならないこと以外ほぼ同様とのことである。スイスの場合は保険加入が滞在許可証申請者に義務付けられており、現地の保険でもかなり高額になるので（加入する保険会社、保険の対応範囲によって違いがあるが、ジュネーヴ州の場合25歳未満で月額最低100SF以上、26歳以上同160SF以上）日本で海外旅行保険等に入る方が良いと思う。その場合は保証額を明記したフランス語か英語の保険加入証明証を発行してもらうことをお忘れなく。なお今年からは収入証明も必要とのことだが、金額の明記された奨学金取得証明あるいはスイスにおける銀行口座証明、またはトラベラーズチェック購入証明があれば問題ないそうである。学費については冬・夏それぞれの学期につき500SFである。ちなみに滞在許可証はスイスの場合フランスのようにパスポートに滞在許可証シールを貼るのではなく独立した滞在許可証が交付され、ジュネーヴ州における学生用滞在許可証 Permis B では労働許可申請をしなくとも週20時間までならアルバイトができる。

大学の授業について述べると、私の在籍する文学・文化専攻の場合、2000-2001年度は中世ルネッサンス、近世以前（1300-1650）啓蒙思想期、文学・美学の4専門からなり、各専門に6~9の授業があったが、2001-2002年度は近世以前と文学・美学の2専門、授業数はそれぞれ9つ、7つへと変更された。単位取得には専門内から少なくとも4つの授業を選択し、そのうち2つの授業について小論文を記し（12ポイントの活字で行間無しで15枚程度）その他にDEA論文（40-50枚程度）を書くことが義務付けられている。私の専攻した当時の文学・美学専門では6つの授業しかなかったので選択の幅は狭かったが、その分クラスの皆とすぐに親しくなれた。授業は指導教授のモダニズム時代の文学（1907-1919）の授業の他、スタンダールの『赤と黒』についての授業、スタール夫人、B・コンスタン、シュレーゲル兄弟についての授業と西洋芸術における芸術家の自画像を扱った授業を選択した。専門課程に正式に登録している生徒数は15人ほどで、そのうち8割は非フランス語圏出身の外国人だった。2001年度（2001-2002）には生徒数が倍増し、フランス語圏からの生徒の割合も増えている。さらに今年度からはフランス・リヨン大学との単位交換も可能となったことも付け加えておく。スイスのDEAもフランスと同様1年で取得でき、さらに1年の延長が可能である。授業時間は2時間だが、実質は90分である。

## フランスとスイスの大学生活の比較

プロヴァンス大学とジュネーヴ大学の授業を比較してみると、まず第一に挙げられるのが先に記した DEA 課程の枠組みの違いであり、要するに選択できる授業にかなりの違いがある。第二にはジュネーヴ大学では授業のはじめに 10 分程で前回の授業のまとめを行う Protocole という口頭要約が生徒に課されることだ。これは毎回一人の生徒が担当し、要点、疑問に思ったことなどを口述する。その他の点では小論文をフランスでは Petit mémoire と呼びスイスでは Travail écrit と呼ぶが、これは 70 をフランスでは Soixante-dix といい、スイスでは Septante というのと同じで内容に大きな違いは無い。

授業以外の活動について述べると、ジュネーヴ大学では先の専門分野毎に月に一度のペースで講演会が行われている。また年に一、二度専攻毎に大きなシンポジウムが開かれ、その他にも講演会、研究会が数多く行われている。また他大学との交流も活発である。無論プロヴァンス大学でも講演会は時折開かれるが、ジュネーヴ大学の文化活動には目を瞠るものがある。学期中は文学部のどこかで毎日必ず講演会や研究会が開かれているといった観がある。

大学の施設面ではジュネーヴ大学のほうがはるかに良い。たとえば大学の中央図書館は蔵書がきちんと管理されており、開館時間も平日は朝 9 時から夜 10 時まで、貸し出しも 15 冊を 4 週間までできるのに対し、プロヴァンス大学ではコンピューター上のカタログにある本でも紛失していたり、開館時間は 6 時まで、ヴァカンス中は閉館し、その上一年に一度は必ずストライキがあり、貸し出し図書は DEA、博士課程の学生で 4 冊までと制限されている。さらに学生が使用可能なインターネットに接続したコンピューターがジュネーブ大学では文学部だけでも 40 台以上あるのに対して、プロヴァンス大学文学部では中央図書館にある 3 台だけである。ジュネーヴ大学では皆が喫煙場所で煙草を吸うのに対し、プロヴァンス大学では禁煙区を含む構内全体に白煙が立ち込めている。また、ジュネーブには大学付属や提携の文化サークル、スポーツクラブが多数ある。勿論このような比較には学費や国民性の違いを考慮せねばならないだろう。しかしジュネーブの方が学生生活に適した都市であることは間違いなく言えると思う。

ただ別の観点から言えばジュネーヴは静か過ぎる街と言えるかもしれない。数少ないカフェは殆どが夜の 7 時には閉まるし、街自体が非常に整然としていて、人々の活気というものはあまり伝わってこない。南仏の喧騒に慣れ親しんだ私にはとりわけ冬場はもの寂しく感じられる。またジュネーヴはフランスでパリに次いで物価の高い都市エクス=アン=プロヴァンスよりも生活費が格段に高いことも付記する。

## おわりに

本稿ではなるべく具体的な例を挙げたつもりであるが、判り難い点もあるかもしれない。さらにこれらはいくまで私の経験例でしかなく、これから留学する方々が場合によっては全く異なる経験をするかもしれない。いずれにせよ留学とは大学に登録することが最終目的ではなく、「その後」の自分の目的があるはずである。大学登録がスムーズに行くか否かに関わらず、状況をよく見極めて行動していただきたいと思う。もし私が留学手続で学んだことがあるとすれば、それは自分を客観視出来るようになったことだと思う。

## インターネット検索用資料

### フランス大使館

[www.ambafrance-jp.org](http://www.ambafrance-jp.org)

### 大学・語学学校等

Institut de Touraine	トゥレーヌ語学センター	<a href="http://www.institut-touraine.asso.fr">www.institut-touraine.asso.fr</a>
Université de Geneve	ジュネーヴ大学	<a href="http://www.unige.ch">www.unige.ch</a>
	大学附属フランス語講座	<a href="http://www.unige.ch/lettres/elcf">www.unige.ch/lettres/elcf</a>
Université de Lausanne	ローザンヌ大学	<a href="http://www.unil.ch">www.unil.ch</a>
Université de Neuchatel	ヌーシャテル大学	<a href="http://www.unine.ch">www.unine.ch</a>
	夏季フランス語講座	<a href="http://www.unine.ch/sfm">www.unine.ch/sfm</a>

# A Z U R

本記事は、成城大学フランス語フランス文化研究会の  
機関誌『AZUR』第3号(2002年3月発行)に掲載されました。

成城大学フランス語フランス文化研究会

Société d'étude de la langue et de la culture françaises  
de l'Université Seijo

[http://www.seijo.ac.jp/graduate/gslit/orig/areas/europe/azur\\_index.html](http://www.seijo.ac.jp/graduate/gslit/orig/areas/europe/azur_index.html)